三味線と僕の距離感

大阪市立住吉中学校　３年　石川（いしかわ）　颯一（そういち）

三味線と僕の距離感

大阪府　大阪市立住吉中学校

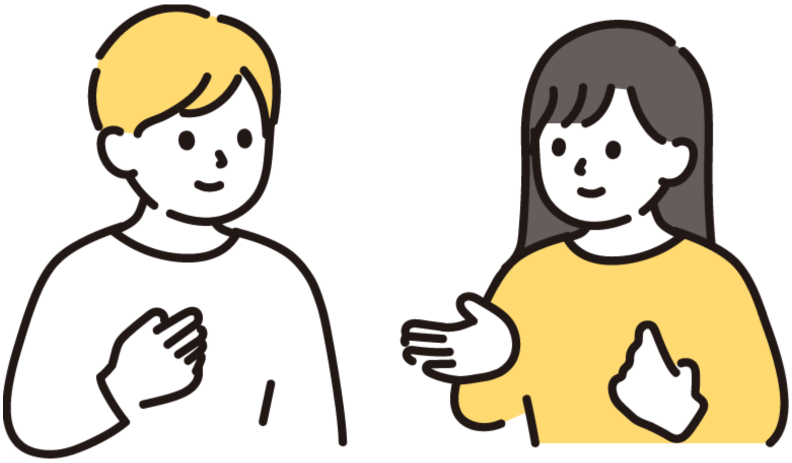
石川　颯一

僕の祖父の弟は、長唄の唄い手で人間国宝に認定されています。そして、祖父と父は三味線を弾いています。そんな家族の中で、僕も三味線を始めることになりました。初めて三味線を手にしたのは、幼稚園の時です。父が僕に三味線を弾かせてくれたのがきっかけでした。重たい木の感触、張られた糸、そして初めて出した不思議な音。最初はよく分からなかったけど、何度も引いていくうちに、「もっと音を出してみたい」と思うようになってきました。それから、僕の三味線の練習が始まりました。最初は指が痛くて辛かったです。うまく音が出なくてイライラした時もありました。でも少しずつ音がなるようになっていくと、毎日の積み重ねが大事だということがその時初めて感じました。けれども、僕の中でいつからか違和感を感じるようになっていました。家族に三味線をやっている人が多いから、「自分も当然やるもの」という空気を感じていました。祖父も父も熱心に続けていて、僕にとって三味線は「あたりまえのもの」でした。だけどその「あたりまえ」が、時々、重たく感じることがありました。「僕は本当にこの道に進みたいのか」「三味線が「好き」なのか、それとも「やるべきだから」やっているのか」そう自分に問いかける時間が増えてきました。人間国宝という言葉の重み。何世代にもわたって続いている伝統。もちろん、そのすごさは感じているし、心から尊敬しています。でも、今の僕は、それを「受け継ぎたい」とは思っていません。それが、僕の正直な気持ちです。それでも三味線と向き合った時間は、僕に大切なことを教えてくれました。音で気持ちを表すことを教えてくれました。そして、「伝統」や「文化」は、ただ形として残すだけではなく、自分がそれにどう向き合うかが大事だということを

感じました。今は、「国際化」という言葉をよく耳にします。外国の言葉を学んだり、他の国の文化を理解したりすることは大切だと思います。でもそれと同じくらい、自分の国の文化をどう感じているか、自分の中にどうあるかを考えることも、国際化の一つの形だと僕は思います。

僕は、三味線を続けるかどうかまだ答えを出せてていりません。家族のように極めたいとは、正直思っていません。しかし、三味線を通して得た気づきや、自分自身と向き合った時間は、僕の中にしっかりと残っています。そして、それはきっと、将来どこかで僕を助けてくれると思います。祖父や祖父の弟、父の演奏を目の前で見て、言葉にできない音の力にひかれました。その瞬間、「僕もやってみたい」と思いました。祖父や父が弾く姿も小さいころから見ていたけれど、その日感じた音の衝撃は特別でした。でも僕はそれを「受け継ぎたい」とは思わないです。「受け継がない」という選択も、文化と向き合った結果のひとつです。やめること＝否定ではなくて、「考えてチャレンジ末に選んだこと」ならそれも一つの向き合い方です。それに、三味線のことを聞かれたら、僕は自信を持って話せます。三味線を弾いていた時間の中に、僕なりの文化との関わりがあるからです。これから先、世界とつながる機会はもっと増えると思います。そんなとき、自分の国のことを知っているかどうか、自分の文化をどう語れるかということは、とても大事なのではなりかと思います。伝統というものは、無理に守るものではなくて、自分の中に残っていくものかもしれません。三味線を続けるかは分からないけれど、あの音色は今でも耳に残っています。そして、それを通して考えたことと感じたことは、きっと僕の中に生き続けます。三味線との距離は、いつかまた近くなるかもしれません。今はまだ、その途中です。でも、どんな選択をしたとしても、僕が三味線から

もらった気持ちや時間は、確かに、自分の中にも大切にしています。そのことを忘れずに、これからも自分のペースで文化に向き会っていこうと思います。



『イジメ』無き社会を目指して

大阪教育大学附属池田中学校　２年　井村（いむら）　檀果（まゆか）

『イジメ』無き社会を目指して

大阪府　大阪教育大学附属池田中学校　二年
井村　檀果

『イジメ』を無くすことは可能だと思いますか？『イジメ』を世の中から無くすのは難しいことです。ですが、私は自分ができることをして、『イジメ』無き社会を目指していきたいです。

ではなぜ、『イジメ』は無くならないのでしょうか。一般的にいじめられている人は「可哀想」、いじめる人は「悪い人」と思う人が多いのではないでしょうか。でも、『イジメ』はそんなに単純なものなのでしょうか。

私は、そもそもいじめた人はいじめをしたくて『イジメ』を起こした、という前提があるように感じます。しかし、果たしてそんな安直な考えで『イジメ』をしている人はいるのでしょうか。私は、『イジメ』をしてしまう人も、実は、心のどこかに問題を抱えているのではないかと思っています。本人に自覚があるかはわかりませんが、例えば、「親にもっと自分を見て欲しい」などの家庭内ネグレクトや、家庭内暴力、周りからの過度な期待によるストレス、過去に人に傷つけられた経験など、様々な要因がいじめをしている人にあるのではないかと考えています。こういった心の問題を抱えていた結果、『イジメ』が起きたという可能性も考えられると思います。

私自身、小学校の時にいじめを受け、傷つくことがありました。陰口、悪口、そして暴言が主にあったと思います。時には物が隠されたこともありました。担任の先生が寄り添ってくれたから、乗り越えることができました。しかし、当時の私にとっては『イジメ』の光景が当たり前で、そこで生活をするためには、常に周りを気にし、先生以外、周りを信頼できないという「常識」が身に付いてしまっていました。ところが中学校になり、『イジメ』が当たり前では無い環境に出会いま

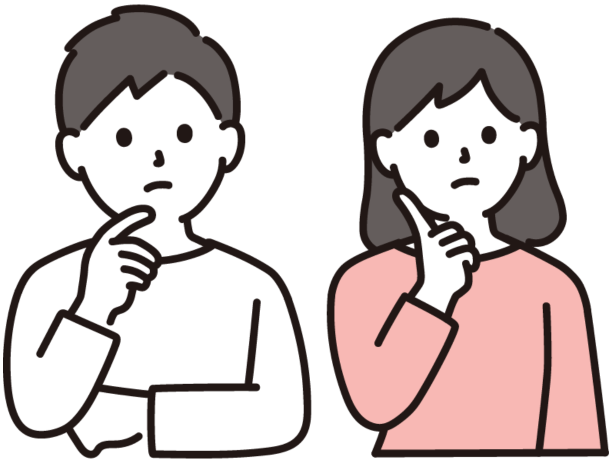
した。普通に優しく接してくれる周りの人たちに、私の中で根付いた周りに対する不信感と世間一般の「常識」のギャップに悩まされることもありました。しかし、これが本来の社会なのだと感じました。私は、自分自身の経験からも、『イジメ』はその時だけでなくその後も影響すると感じています。

では皆さんに質問します。「『イジメ』において、悪いのは誰でしょう？」人によって答えは様々だと思います。ある人は「いじめられる方が悪い。嫌なら嫌と言えばそれで済むじゃないか。」と言うでしょう。別の人は「いじめる方が悪い。どんな理由があったとしてもいじめるのは論外。」と言うでしょう。また別の人は「いじめる方はもちろん悪いけれど、いじめられる方にも非があったのかもしれない。お互いに悪かったんじゃないか。」と考えるかもしれません。今出したのは極端な一例ですが、このように、問いが同じでも様々な考えが出てくるのです。私は、「『イジメ』の『誰が悪い』」といった問いではない解決が大切だと感じています。

私はこうした考えから、世の中から『イジメ』をなくすために、こう提案します。いじめた人も、いじめられた人も、心のケアができる社会にするということです。なぜなら、『イジメ』が起こる原因は、心に抱えている問題だと思うからです。心に抱えている問題を取り除くには、心のケアが大切だと考えます。

私は今、将来の夢について迷っています。私は小学校の時に寄り添ってくれた担任の先生の思い出が強く、私も小学校の先生として『イジメ』と向き合い、子どもたちに人の優しさを伝えることをしたいと思ってきました。また、最近は周りの人の影響で、医者にも興味があります。心療内科医として、心の傷に直接向き合うことも私ができることだと考えています。他にも、臨床心理士になってカウンセラーになる選択肢もあると考えています。

私は、これまでの経験を振り返り、何が自分にできるのか、何をしたいのかと考えた時傷ついた人の心をケアすることに携わりたいと考えています。そしてこの社会から「イジメ」を無くし、誰もが安心して暮らせる社会に貢献したいと思っています。



変わっているの続き

泉大津市立誠風中学校　３年　中村（なかむら）　千咲（ちさき）

変わっているの続き

大阪府　泉大津市立　誠風中学校　３年

中村　千咲

私は変です。そして皆さんも変です。この言葉を聞き、不快に思う人は多いのではないでしょうか。そこで、実際に変とはなんなのでしょう。この変という言葉をネガティブ的に使うことこそ、言葉を使う上で間違っているのではと考えました。変だからなんなのでしょう。自分と違うから変なら、自分と全く同じ人はいるのでしょうか。いいえ、同じ人などいるはずがありません。だから、「他の人と違っていてすごい」というのが正しいのではないでしょうか。

私が変という言葉についての考えを変えるべきだと思った理由は二つあります。

まず一つ目は、変といじめの繋がりです。私は先日、学校で「変」という言葉についての動画を見ました。これは、変についてを小学生が考える動画です。小学生たちの話を聞いていた動画の中のある女性が、変についてシールの例えを出していました。これに、私はとても的を得るような例えだと感じました。シールとは、貼ったばかりに剥がせばすぐ取れますが、時間が経てば経つほど取れなくなるのです。

誰かが誰かを変と言い始めたばかりに、誰かが否定してシールを取ればそこで終わります。しかし、そのまま言われ続け、何も行動が起きずに放置され続けていると、いじめが始まったり、言われた相手が学校に来なくなったりと、状況が悪くなり続けて変というシールはずっと心に残り続けます。

二つ目は、普通と変の違いです。前提として他人は自分と違います。別人だから当たり前だというのに、やはり人は比べてしまいます。これについて私は、行動できるのなら比べるのは問題ないと思っています。自分より劣っていると思うなら、言葉にせず自己肯定感を上げてから慢心せず、何かに取り組もうとすることで

きるのならこれは問題ではないでしょう。自分より優れている人を見る場合も、自分はこの人よりできないと自覚し、さらに頑張ろうと思えるのなら問題ないと思います。しかし、人はみんな異なります。見ず知らずの人も、友達も、親も、兄弟も、自分とは違う別人なのです。他の人と異なっている事は当たり前です。

多くの人が言っています。普通とはなんなのか、皆違うことこそ普通なのではないか。その中で私は思います。普通とは何か、自分は普通なのか、そう考えた上で自分は自分なんだという考えにたどり着き、普通を自分の納得する形で受け入れられた時こそ、本当に自立した人になるのだと私は考えました。

こういった人との違い、を受け入れにくいところは、集団行動から外れることに焦りを覚える日本人ならではの欠点になっているのでしょう。

このことを根本から変えるには、性格や考え方を変えるといった無理難題がつきまといます。これはおそらく不可能でしょう。友人の前でつい口が悪くなってしまうのも、不満が漏れ出てしまうのも、言わないように常に考えて話すのは、ほとんどの人には難しいでしょう。

ですが、このことについては根本から変える必要はないのです。ただ、初めに言ったように言葉を変えてみるのです。

「他の人と違う」だからなんなのでしょう。

この言葉の先に何が入るのかにより、受け取り手の感じ方は大きく変わっていきます。

もし、この先が「だから話したくない」「だから嫌い」と続くのならば、いじめにつながるでしょう。

ですが、もし変を、他の人との違いを、互いに認め合うことができるように変えていけるのなら、その続きを「だからすごい」「だから真似をしたい」そう言い換えることができるのなら、いじめは格段に減ると私は考えま

した。なので、私自身が変ということを恥じず友人の変を認め、変わっている事こそが普通だと、これまでの常識を変えていきたいと思っています。

「ありがとう」

富田林市立第三中学校　３年　中山（なかやま）　葉月（はづき）

「ありがとう」

大阪府　富田林市立第三中学校　三年

中山　葉月

　皆さんは日頃から相手に対して「ありがとう」と気持ちを込めて伝えられていますか？

私は多くの人に支えられ今を生きています。

　私は、自分に自信を持って意見を伝えることが得意ではありません。なので時々、

「この子のように、ハキハキと意見を伝えられたらいいのに。」

と思ったりこの子みたいになりたいと思うことが多々ありました。意見を伝えても否定されてしまった時にはこれからどう話せばいいのだろうか、と思ったりどうしてもネガティブ思考になっていたからです。

　なので私は意見を堂々と伝えられるようになりたい！自信を持ちたい！と思い学級委員になりました。学級委員になったとはいえ自分がこれからどうすればいいのかわかりませんでした。どうしたら自分の意見に「自信」を持てるのかと。

　そんな時にある先生がおっしゃった言葉が印象に残っています。

「一番認めたくないことを認めればあっという間に成長できます。」

この言葉を耳にしたときとても心に響きました。それから私は自分がどういう性格なのか紙に書き写していきました。

　すると、心では考えがあっても行動に起こせなかったり、周りと考えが違っていると戸惑ってしまったり消極的になっていたことが分かりました。

　そんな時、家族にどうするべきか相談しました。するとお父さんもお母さんも絶対に味方だよと言い、長い時間話を聞いてアドバイスをしてくれた時に家族という存在はこんなにも温かく優しいのだと改めて気付きました。

その時に家族には真っ先に「ありがとう」と思いました。目を見て話を聞いてくれて決して遮らず否定をせず温かくしてくれたからで

す。ですが私はここまでの優しさやありがたみを持って接することができていたのかと思うようになりました。このことに気付けたのは先生の言葉や家族からの言葉など多くの人たちがいてこそだったからです。

それから私は以前よりも積極的に意見を伝えたり、相づちを打ったり否定から入るのではなく肯定したり意見を言い通すのではなく見つめ直してみることで少しずつ自信をつけられるようになりました。そうすることで少しでも成長した姿を家族や先生にみてもらい「ありがとう」を返したかったからです。

そんな時、ある曲の歌詞が私の背中を押してくれました。「生まれ変わるなら？また私だね。」という歌詞を聞いたときに自分に自信があり自分自身を愛せているからこその言葉なんだなと感じました。

なので私は一年後に生まれ変わることはないけれど自分自身に自信を持ち愛することができるように「今」を生きたいなと思います。そして、少しずつ「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えていきたいです。

最後に先生には「一つ一つの授業の準備に時間を使っていただきありがとうございます」・「みんなが理解しやすいように授業をしていただきありがとうございます」、友達へ「いつも話をしてくれてありがとう」・「いつも笑顔にさせてくれてありがとう」と伝えたいです。何より家族に、「他愛もない話を聞いてくれてありがとう」・「支えてくれて味方でいてくれてありがとう」と伝えたいです。

皆さんも今日、日頃の感謝を「ありがとう」を気持ちを込めて伝えてみませんか？

努力賞

デジタルデトックスのススメ

守口市立樟風中学校　３年　福山（ふくやま）　恵彩（めい）

デジタルデトックスのススメ

大阪府　守口市立樟風中学校

福山恵彩

突然ですが、皆さんに質問です。皆さんはスマホやパソコンを四六時中見てはいませんか。実は、私も家ではずっとスマホを触っているのです。スマホは確かに便利です。しかし、ずっと触っていることはとても危険なことなのです。

私には、自分含め5人の家族がいます。家族は皆スマホやテレビ、ゲームに夢中でずっと無言で、食事中にまで電子機器を触っているため会話が生まれることがまったくといってないことが多いのです。

私の弟や妹はゲーム、タブレットを四六時中触って、気に入らないことがあると怒鳴ったりタブレットの画面を思いっきり叩いたりなど。それを見た親が怒ってタブレットやゲーム機を禁止にすることも。禁止にされると弟や妹は狂ったように泣き叫びます。これではまるで依存しているみたいではないか、と両親も頭を抱えているのです。

私も次の日は学校なのにスマホを触ってふと時計を見ると日付を越えていることも多々あり、どうしたらよいのか悩んでいました。

これではいけないと思ったのか両親がある日このようなルールを設けました。それは、「週に一度スマホやゲームを禁止する日を作ろう」というものでした。このルール、最初は妹や弟、私も大ブーイングをしていたのですが、親から一蹴され渋々従うことに。「こんなものでどうにかなるものなのか。」と常日頃思っていました。

禁止日が始まってから、家族の中で大きな変化が訪れました。まず、家族内での会話が増えたことです。食事中にスマホを触ることがないため、自然と会話が増えていき、今ではとてもにぎやかな食卓へと変化しました。次に、娯楽がスマホだけではなくなったことです。今まではスマホのみを娯楽としていたた

め、スマホ等を取り上げられてしまうと寝る以外の選択肢がなかったのです。が、慣れてくると絵を描いたり、本を読んだり、家族と話したりなど他の娯楽を見つけられるようになったのも大きな変化です。
次に弟と妹の変化です。今まではゲームの結果が思うようにいかないと怒って画面を叩いたりしていたのが、ゲームで気にくわなくても叩いたりすることがなくなったのです。ただ、タブレットを取り上げられると泣くことはなくなっていないのでこれからなおっていくといいなと思います。
　最後に私自身の変化です。禁止の日がなかった頃は日付が変わるまで起きていて、次の日起きれない、ということが多かったのですが、禁止の日ができると、その日限りではありますが寝る時間が二十二時という健康的な時間帯に寝て、六時半に起きる早寝早起きができるようになりました。早寝早起きを禁止の日だけではなく、他の日にもできるようにしていこうと考えています。
　このように、週に一度スマホやゲームから距離をおくことで家族や自分自身に大きな良い変化がもたらされました。禁止の日には心に余裕が生まれ、家族内がにぎやかに、温かくなっていくのです。
　皆さんにもう一度質問します。皆さんはスマホやパソコンを四六時中触ってはいませんかもし四六時中触っているのであれば、一度電子機器の世界から距離をとってみてはどうでしょうか。距離をとることで、心に余裕が生まれ、周りを見る余裕をつくることができます。ずっと見てしまって困っている方は一度インターネットの世界から抜け出して周囲を見渡してみてください。きっと今までとはまた違った景色を見られるかもしれませんよ。

中学生の皆さんに今私が伝えたいこと

帝塚山学院中学校　２年　益田（ますだ）　果歩（かほ）

中学生の皆さんに今私が伝えたいこと

大阪府　帝塚山学院中学校　2年

益田　果歩

「地震です！地震です！」今あなたは何を考えていましたか。本当に地震が起きていたらあなたはどのように行動しましたか。一瞬の事が命をなくすことにつながってしまうのです。一人ひとりが自分の命を守ることが私たちには大切なことだと私は思います。「え？どうしたらいいの？」と思った人はまず、地震が起きたらすぐに身を守る行動をとってください。今いる場所で落ちてくるものはないか、自分自身がけがをしないような場所に移動しましょう。そして、身を守る行動は、地震が起こる前から始まっているのです。

私は中学1年生の夏休み念願の防災士の資格を取りました。私も、家族も避難生活を送った経験がありません。しかし、母が私を妊娠したと知ったその日に東日本大震災が起りました。その様子をテレビで見た母は、母親になれる喜びよりも、自分は子どもの命を守れる母親になれるのかと大泣きしたそうです。そんな母から、小さい子どもたちの命がたくさんなくなった話を物心ついた時から聞かされていました。いつか勉強して命を守れるようになりたいと防災士の資格を取った1つ目の理由です。

災害が多い国、日本。そして、私たちの住む大阪では2018年に大阪北部地震が起こりました。高槻で私たちと同じ小学生だった子がなくなったことも私にとっては防災を勉強しないといけないと思ったきっかけで、防災士の資格を取った2つ目の理由です。

「身を守る」言葉にすると簡単ですが、実際には普段からの意識が大切だと私は考えます。もし今いる場所で震度5以上の揺れがきたらどうなるのか。本棚の本が落ちてくるかもしれない、窓ガラスが割れるかもしれない、天井が落ちてくるかもしれない、ブロック塀が倒れてくるかもしれない。そんな事かもしれ

ない」ことが現実に起こります。そのために、今いる場所がどんな場所なのか観察する必要があります。倒れてくるものはないか、危ない場所はどこか、避難経路や非常口はどこかなど。自分の家だったら、倒れそうなもの、落ちそうなものがあればそれを落ちないように自分で改善したりすることができます。

よく「防災リュックを準備しよう。」「お水は1人1日3L必要です」などといわれていますが、それは命が助かってからの話です。もちろん物を備えは本当に大切なのですが、それよりもまず、私たちが自分自身で自分の身を守れる事が大切な備えだと考えます。

私の住む地域では、防災ジュニアリーダーがいて中学生から高校生卒業までの有志のメンバーが集まって防災活動をすることができます。私も中学1年生になって防災ジュニアリーダーに所属しました。防災のイベントに参加したりいそれ以外でも防災のお話をさせてもらったりしました。そんな中で「私は災害が起きても助かる」というような意味の言葉を耳にすることが多くありました。そういうことを「正常性バイアス」というそうで、バイアスがあると、いざという時に身体が動けなくなってしまうのではないかと考えます。最初に私が「地震です！」といったときに、それぞれが身を守る行動をとれることで、大きな地震が来た時にも1番最初の備えができると私は信じています。

災害が起こると、地域の中学生の役割がとても重要だと聞きます。私たちが、自分の身を自分で守れるようになることで、それ以外の大切な人たちも助けれます。中学生の皆さん、いつか来る大きな地震に対して、他人ごとではなく自分ごとにしてください。そしていざという時にまずは自分の命を守れるようになってください。このことを今の私だから伝えられる言葉で中学生の皆さんの災害への意識をもっと高くしていきたいです。

これから一緒に防災について考えてみませ

んか。

努力賞

私にとっての私

泉佐野市立第三中学校　３年　山中（やまなか）　寧々（ねね）

私にとっての私

大阪府　泉佐野市立第三中学校　三年

山中寧々

私は今、山中寧々として生きています。感情をもって。どれだけ辛くても生きています。いや、沢山の人に生かしてもらっています。

私は何度も自分のことを嫌いになりました。

小学校・低学年の頃、スポーツも勉強も何も出来ない自分、そして女の子として生まれた自分が嫌いでした。性別というものが嫌いで嫌いで仕方がなかったです。何をしても、「男の子だから」「女の子だから」という言葉が文末にある。女の子だから何？とずっと悩んでいました。最終的には自分の性別がなんなのか、何が好きなのか分からなくなり、自分を見失いました。

中・高学年になると、本格的に授業でLGBTQについて学習しました。授業の中で、異性や同性どちらへも魅力を感じることや、性別という概念を超え恋愛をする人もいるのだと知りました。私は、LGBTQの学習を経てありのままの自分を愛すということを学ぶことが出来ました。

そして中学校へ入学すると、一人の人に一目惚れをしました。その人のために変わろうと努力しました。相手好みの格好をしたり、色々なヘアアレンジやメイクを試してみたり。自分でも分かる程変わっていくのが本当に楽しかったです。多くの友達に褒めてもらったり、何より好意を寄せる人に褒めてもらえた時は言葉にならないぐらい嬉しかったのを今でも覚えています。だけど徐々に「何か違うな」と思い始めました。その違和感の正体は他者の好みの格好ばかりして、自分がしたい格好ができていなかったからです。その違和感に気づいた私は、すぐに自分の好きなメイクをして、自分の好きな服を着てみたりしました。その瞬間、私は本当の自分を見つけることができた気がしました。自分がしたい格好をしている時の私が今までで一番可愛く

見えたし、自分が大好きになれました。何にも囚われず、何も気にせず。あの時、まるで私だけの世界にいるみたいでした。

そして変わった私を、私の家族や友達はみんな「いいじゃん！」「かわいいよ！」と褒めてくれたんです。それが何よりも嬉しかったです。変わった私を良く思わない人もいる様だったけど、「それでもいい」と思えるくらい友達や家族に褒めてもらいました。そこで「私」って本当に周りの人に恵まれているなと実感しました。きっとあの時、私の周りに支えてくれる人がいなかったら、私はまだ自分が嫌いなままだったでしょう。

だから、私は今生きています。自分を何よりも愛していて、まわりの人の温かさと、たくさんの出会いがあったからです。私にとって私は、本当に可愛くて本当に唯一無二な存在だと思っています。なぜなら、これから一生付き合っていく、何よりも理解している存在が自分だからです。自分を好きになれていない人がいたら、その人らしさを私らしく全力で応援して、認めていきたいです。人間誰しもが自分自身を愛することが大切だと、私は思うからです。

努力賞

注意という名の愛

守口市立樟風中学校　３年　山中（やまなか）　円（まどか）

注意という名の愛

大阪府守口市立樟風中学校　3年

山中　円

突然ですが、皆さんが最後に注意されたのはいつですか。幼稚園、小学校、そして中学校。年齢が上がるにつれて注意される、という機会は減っていくと思います。そんな中で中学生、というのは一番注意の有無の差が激しい時期であると私は思います。

小学校と比べて自由が増え、新たな制服、友人に囲まれた中学校生活。期待に胸を躍らせながら中学校に入学し、中学校に慣れた頃目につくのはルールを破る生徒達でした。スカート丈が短い生徒か、授業を妨害する生徒中には自転車通学する生徒など、私の学年は実際一部の人の素行が悪い印象がありました度重なる学年集会で先生の注意を聞くたびに私は生徒である以上、校則は守るべきなのにやりたくないの一言で突っぱねる生徒達が理解できずにいました。

そんな私も同じ穴の狢であったと気づいたのは中学一年生が終わるといった時のことでした。小学校からの友人に「最近円と過ごしていて嫌なことがある。」と言われたのです。その連絡を見た時私は焦りました。過去にも同じような事があったからです。私は小学校の頃、友人関係のトラブルを起こしたことがあり、その時も私の言動が理由でした。彼女との関係に亀裂を入れたくないという思いで私は友人にどこが嫌だったのか尋ねました。

その友人の言葉は私の自分勝手な世界を壊していきました。告げられる悪癖はどれも無意識のもので、それは嫌だと十分理解できるもの。無意識にそんなことを続けていた自分に嫌気がさして気づいたら涙がこぼれ落ちていました。当時、友人は小学校の頃避けられていた私を見て、「自分があの立場だったら人生楽しめないな、少しでも楽しくなればいいな」と思い私に声をかけてくれたそうでしたその言葉に私はこんなにも自分のことを気にか

けてくれていた友人がいたのだと、その優しさを無下にしていたのだと申し訳なさでいっぱいになり、また涙が溢れました。友人との連絡を終えた後、初めて私はあの時理解できなかった生徒達と一緒だったことに気づきました。

　自分の悪いところは直すべきなのに、私は自分と向き合いたくないの一言で突っぱね続けていたのです。思えば私はよく注意を受けることがありました。先生から、友人から、家族から。でもそのどれにも私は応えていませんでした。いいえ、応えたと思っていたのです。傷付くのが怖いから。自分の間違いを認めたくなかったから。私は相手からの注意という名の愛を拒否し続けていました。

　それから私は、人の注意を理解しようとするようになりました。注意というのは手間がかかります。友人同士なら関係が崩れるかもしれませんし、注意しても聞いてくれる保証がないからです。だからこそ、そんな手間をかけてまでしてくれる注意をないがしろにするのはよくないと思ったからです。そうして行動だけを受け取るのではなく、なぜその注意を相手がしてくれているのか考えました。そうして、学校の些細な注意や家族の注意をみてみるとそこには相手からの愛がありました。自分のことを考えて告げてくれた相手なりの思いやりがありました。

　これからも私は色々な人に注意を受けて大人になっていくのでしょう。中には共感のできない注意を受ける事もあるでしょう。それでも私は注意という名の愛を大切にしたいです。共感できない愛は受け流して、共感できる愛はちゃんと行動で返して。そして私も注意という愛を誰かに送りたいと、そう思うのです。

拳より言葉を選びたい

帝塚山学院中学校　３年　湯澤（ゆざわ）　仁乃（にの）

拳より言葉を選びたい

大阪府　帝塚山学院中学校　３年
湯澤　仁乃

「仁乃の顔って豚みたい。特に鼻がね」
そう笑う友人の声が聞こえたとき、頭がカッと熱くなった。気が付くと、私はその友人の頬を、この右手で叩いていた。すると潮が引くように、今度は全身の血がぐーっと足のほうに流れていくのを感じた。私の頭は赤かっただろうか。それとも青かっただろうか。自分でも、あのときのことはよくわからない。
「仁乃、一体どうしちゃったの？」
そばで見ていたクラスメイトが駆け寄って声をかけてくれたことで、私ははっと正気を取り戻した。同時に涙が溢れてきた。情けない。申し訳ない。だけど悔しい。さまざまな感情が猛烈な勢いで襲ってきた。
次第に冷静さを取り戻した私は、その日のうちに友人に謝罪した。友人は「いいよ」と許してくれはしたが、私のしたことは、この程度の謝罪で許されることなのか。いや、許されるはずがないということくらい自分でもわかっていた。
思春期の真っ只中にいる私だ。親の厳しい言葉にはすぐに反抗したくなるし、街で交通ルールを無視して歩いてくる知らない大人にも我慢ならない。まるで瞬間湯沸かし器のようだ、と人をからかっていう言葉があるが、それはまさしく私のことだ。しかし、そう言って開き直ってはいけないのだろう。
翌日、憂鬱な気持ちを引きずったまま学校に行くと担任の先生に呼ばれて、私がしてしまったことについて説明を求められた。謝罪文を書いた。さらには生徒指導の先生にも呼ばれて指導を受けた。そのたびに自分の行動を振り返って反省もしたけれど、もしもこの先、同じように怒りを感じるような出来事に遭遇してしまったら、私は冷静なままでいられるだろうか。腹が立つものは腹が立つのだ。
一体どうすれば……。

何日経ってもなかなか気持ちにけりのつかない私だったが、ふと、英語の教科書に載っているローザ・パークスという黒人女性の話を思い出した。

一九五五年、ローザはアメリカのアラバマ州でバスに乗っていた。当時のアメリカ南部では白人と黒人が同じ席に座ることが許されず、黒人は白人に席を譲る決まりがあったそうだ。けれども彼女は、白人に席を譲ることを拒んだ。その行動は「モンゴメリー・バス・ボイコット」という大きな抗議運動につながったという。

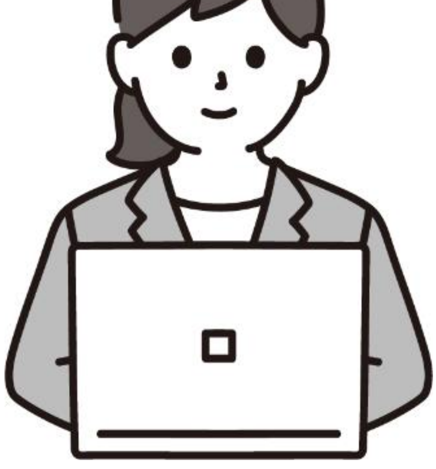
彼女の怒りは想像を絶するものだ。だが彼女は大声を出したりしなかった。誰かを傷つけたりもしなかった。ただ「席を譲らない」という静かな抵抗で怒りを示した。だからこそ彼女の抗議は、やがてアメリカ全体に人種差別をなくそうとする大きな流れを生んだのだろう。私は彼女の逸話に、怒りをそのままぶつけることなく心に留める我慢強さと、信念を貫こうとする力強さを感じた。「ローザのような人こそ本当の強さを持っているのだ」と思った。

あのとき、私は卑劣な行動に出ることなく、心の奥に生まれた怒りを一度静かに受けとめて、言葉の力を使って抵抗するべきだったのだ。「陰口を叩かないでほしい。私はどうしようもなく傷ついた。それをわかってほしかった」と。

これから先、同じような感情に飲み込まれそうになったときは一度深呼吸して怒りを鎮めたい。そして、自分の思いをまっすぐ届けようとする姿勢を忘れたくない。たとえすぐには理解してもらえなくても。

こうしてあの出来事を振り返ってみると、当時とはまるで違う自分の姿が眼に浮かぶ。今ならば自分の意に反する状況に出くわしても、拳の代わりに言葉の力で応じられる。そんな自分の姿が見える。ローザの静かな強さから、私はこのようなことを学んだ。思春期

からの卒業も近いだろうか。



努力賞

私は伝えなければならない。

大阪市立東中学校　１年　由利（ゆり）　理子（りこ）

私は伝えなければならない。

大阪府　大阪市立東中学校　一年

由利　理子

私は伝えなければならない。勉強の楽しさを。大切さを。勉強ができる環境で生活ができるありがたさを。

私たちは日々学生として学校に通っています。私たちは一年の大半を学校で過ごしているため、学校へ行くことはあたり前だと思う人が多いのではないでしょうか。学校へ行くことは日常化していますが、みなさんは学校がある意味を考えたことはありますか。学校とは子どもが大人になり社会に出るまでに「自立した個人」を育てるための学び舎です。「学び」と聞くと、「勉強」を連想する人が多いのではないでしょうか。ですが「自立した個人」を育てるためには学力に基づく、勉強だけではきっと学校の目指す大人に成長しません。それでは学校生活での勉強にはどのような意味がこめられているのでしょうか。

まず「勉」という字には「はげむ」、「強」には「強い力」という意味があります。この二つの意味から考えると、強い力を出して物事にはげむという意味がこめられているのではないでしょうか。

つまり、「勉強」には数学や国語などの教科だけでなく、スポーツや趣味、衣食住も勉強と言えます。このように考えると学校は最高の学び舎だということが分かりますね。

突然ですが世界の人口は約八十億人います。その内子どもの数は約二十一億人です。子どもが二十一億人いるこの世界で約何人の子どが学校に行くことができていないか知っていますか。なんと約二億五千万人もいるのです。すなわち世界の子どもの十人に一人が学校へ行けないのです。学校へ行くことのできない理由は様々ですが、このような子どもたちは発展途上国と呼ばれる貧しい国に多く見られます。それは家計を支えるために両親の仕事を手伝ったり、自分で働きに出たりするから

です。
その現状を知ったある人物は、貧しい子どもたちを救おうとしました。それはマザー・テレサです。マザー・テレサはこの子どもたちのために青空教室を開きました。青空教室でマザー・テレサは地面に木の枝や石を使って勉強を教えていました。この活動はマザー・テレサが一番初めに行った慈善活動であり、この後も多くの人々を助けました。
このようにマザー・テレサのような行動を起こせる人物はなかなかいません。それでは今私たちにできることは何でしょうか。小さなことからで良いのです。本当は募金をしたいのですが、私たちは学生であり、「自分でかせいだお金」いわゆる収入がありません。だから私たちは伝えれば良いのです。父や母、仕事をしている人に広めるのです。勉強の大切さ、意味。そして学校へ行けない子どもも多く居るということを。
私はこの作文を書きながら改めて勉強の大切さ、ありがたさを感じました。私たちが日々学校へ行けるということはあたり前ではなく、感謝すべきことなのです。たとえマザーテレサのような行動力がなくても自分の強い力を出し、何事にもあきらめずはげむのです。あなたの小さな努力でも将来誰かを救うかもしれません。そして伝えることで誰かに気づきを与えるかもしれません。
だから私は、伝えなければならないのです。勉強の楽しさ、大切さ　勉強ができる環境で生活できるありがたさを。